

## 令和5年度 特色ある教育実践研究校報告書 可部小学校

## 1 学校の課題

本校児童の新体力テストでは、全国平均を上回った項目が平成28年度は全項目中93.8%、平成29年度は98.6%と高い水準を維持していた。しかし、その後のグラウンド改修工事や新型コロナウイルス感染症の影響で、平成30年度は89.5%、令和元年度は62.5%(令和2年度は実施見送り)と児童の体力が下降傾向にある。また、令和3・4年度には5年生を対象に調査をしたが、これまでにない厳しい状況であることが見られた(全国平均を上回った項目:令和3年度 男子2項目・女子3項目、令和4年度 男女共4項目、特に両年度とも20mシャトルランの値が非常に低い)。また、2年間実施されなかった水泳指導が昨年度久しぶりに再開されたが、中・高学年の児童の実態は十分な技能が身に付いておらず、危機感を抱く状況であった。

特にコロナ禍にあつては、接触を避け間隔を空ける、鬼ごっこやタグラグビーのような、追いかけてタッチする内容は控えるなど、巧緻性・俊敏性や児童相互が協力して力を高め合う運動が十分にできなかったため、学習単元のねらいに迫ることができていない領域や学習内容がかなり見られる。

健康教育の伝統校として「心と体の整った健全な児童の育成」を推進してきた本校にあつて、このような状況は地域も保護者も残念な思いを抱かれており、一日も早く本来の児童の姿、学校の姿に戻すことが強く求められている。

## 2 研究主題

主体的・対話的で深い学びを実現する体育科の授業づくり  
～走る喜びを感じるための 場の設定と教師の働きかけ～

## 3 取組内容

## (1) 教科担任制(体育専科)の導入

今年度の研究の柱として、体育専科を設けた。研究部と保体部を円滑につなぎ、児童の体力向上の取組を多面的に行うことができるよう企画・実行した。全学年の系統性を整理するカリキュラム・マネジメントを始めとし、高学年の授業をT1として行い、他学年のサポートやT2としての参加、Google classroomを活用した情報の発信を行った。また、体育通信を通して、教員の悩みを解決したり、児童の成長を共有したりした。

## (2) 合同体育(KABE's UP)の推進

体力向上の糸口として「走ることの楽しさ」を求めて研究を進めたが、児童の運動に関する経験不足が体育嫌いの原因となっているのではないかという仮説から、すべての運動の基礎を構築できる「体づくり運動」の研究を進めた。さらに、今年度は体育専科があるため、通常体育では他の教員が専科任せになってしまうことが危惧されたため、合同体育を推進した。合同体育では、授業開始後すぐに可部小オリジナル準備体操を取り入れたり、複数の教員が授業できる良さを生かして、領域ごとに教員が運動ブースを作って運動を行えるように場の設定をしたりと、学校全体で足並みを揃えた取組を行った。

## (3) オリジナル準備体操「可部っ子体操」

児童が楽しく運動に取り組めるよう、音楽に合わせて心と体をほぐせる体操を独自に考案した。体操の中には、屈伸や伸脚などの基本的な準備体操に加え、かえるの足打ち、スクワット、連続ジャンプなど、普段の生活では行わない動きも含めて、体力が向上する運動を取り入れた。



可部っ子体操は、合同体育の授業開始直後やおはようタイムの開始直後、運動会の準備体操などで導入した。また、冬季には「可部っ子体操縄跳び ver.」を考案し、「広島一体力のある学校へ」を合言葉に、おはようタイムや授業開始直後に導入した。

#### (4) 業前運動「おはようタイム」

週に1回8:20~8:35の15分程度の時間を活用して、全学年が簡単な運動に取り組んだ。内容は保体部が検討し、重点課題である「走力」に特化した内容を提案した。前期は「短距離」の走り方のポイントを知ること、「正しく走る」ことを目指し、後期は「長距離」を走る際に「自分のペース」を知ること、動きを持続する力を高めるよう取り組んだ。

#### (5) ロング昼休憩「わくわくタイム」

毎週火曜日の掃除時間を休憩時間に充て、昼休憩を40分間確保した。わくわくタイム中は原則外遊びを行うよう児童に呼びかけているため、たくさんの児童が運動に親しむ機会となった。学年や学級によっては、みんな遊びや兄弟学級(ペア学級)での交流などの工夫を凝らした遊びを行っていた。

#### (6) 運動委員会による体力向上プロジェクト

運動委員会が体力向上のための取組を大きく二つ行った。一つ目は、Google スライドを活用して夏季休業中に家でもできる運動を紹介した。学年ごとにできる運動を変更し、誰でも楽しく簡単にできる運動を紹介し、猛暑で外出できない児童の運動の機会を保障した。二つ目は、サーキット週間である。冬の寒い時期に児童が外で遊びたくなるような場を設定し、運営した。内容は多岐にわたり、ラダーやフラフープ、バスケットボールなど、児童が普段できない運動を経験することができた。

#### (7) 学校ホームページを活用した取組

ホームページを活用して、家庭でできる簡単な運動「怪盗Kからの挑戦状」を紹介した。基本的には「誰でもできる」「簡単にできる」内容となっていて、運動が苦手な児童でも気軽に取り組めることを意識した。運動の内容は、どれも体育科の学習に活用できるものとなっていて、学習の中でも紹介するなど、家庭と学校を結ぶ役目も果たした。



#### (8) 地域の行事と連携した「可部っ子マラソン大会」

今年度10月に、地域で町おこしを行っている「可部夢街道まちづくりの会」というボランティア団体が主催する「可部夢街道まつり」が開催された。その一環としてマラソン大会を企画し、自由参加で募集した。低学年では保護者同伴も呼びかけることにより、家庭への運動啓発を行った。結果として4割弱の児童が参加し、マラソンを親子で楽しむことができた。

#### (9) PTA おやじの会主催登山

校区内にある二つの山に登る企画であり、自由参加で募集した。10月には高松山登山を行い、児童とその保護者が集まり、登山を行った。3月末にはもう一つの山である福王寺登山を控えており、「卒業・進級祝い」として児童の参加を募る。

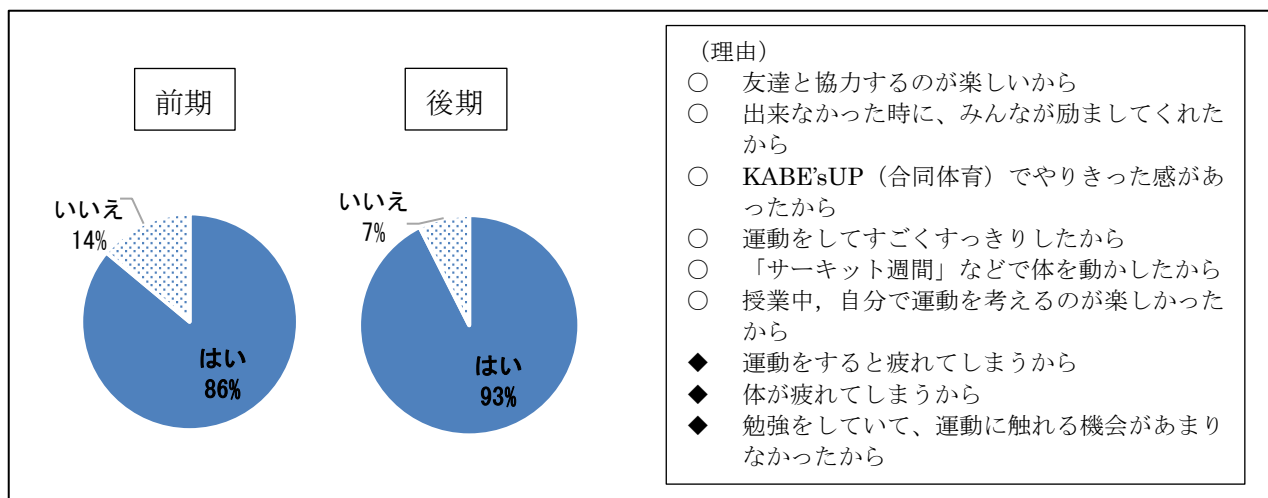
#### (10) 「10 オフ運動」の毎月実施

スクリーンタイムを児童に意識付けるために、毎月10日に10オフ運動を実施した。「10時以降は、相手に連絡しない」ことを教員からだけでなく、委員会からも呼びかけると同時に、達成できたかどうかをGoogle フォームで集計した。

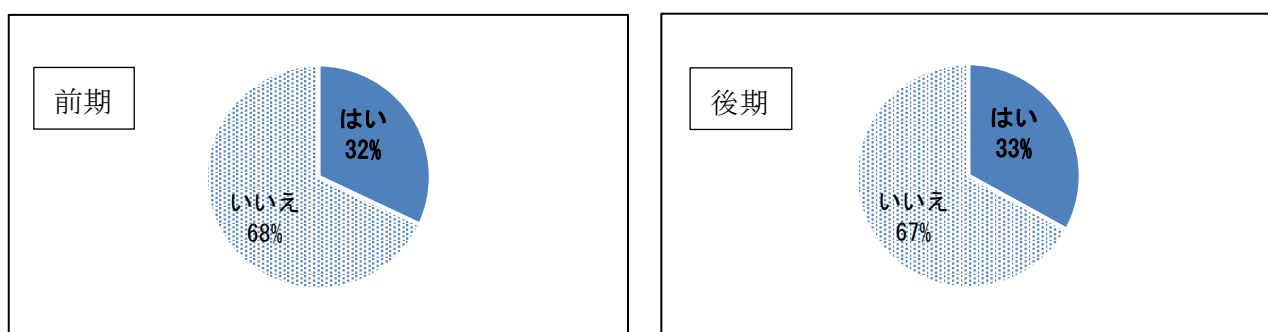
## 4 検証結果

★児童アンケートを行ったところ、以下のような結果となった。

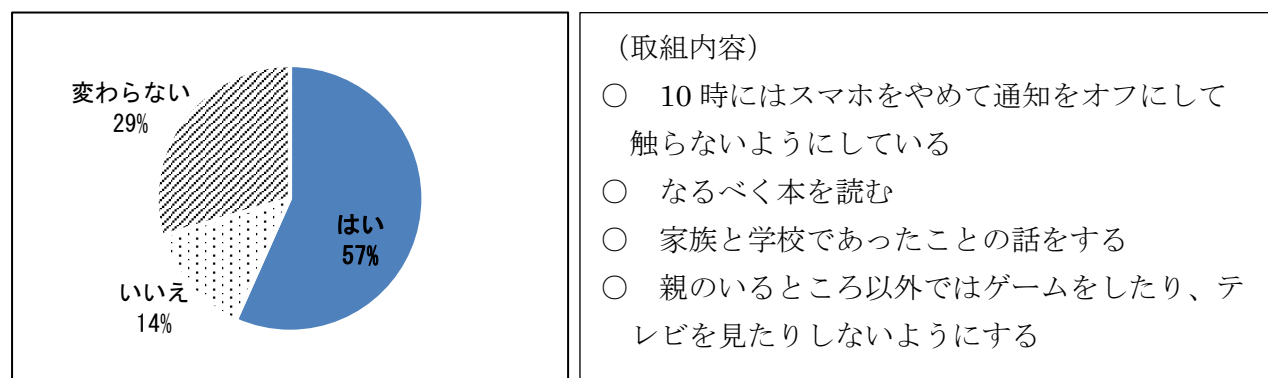
### (1) 運動は好きですか？



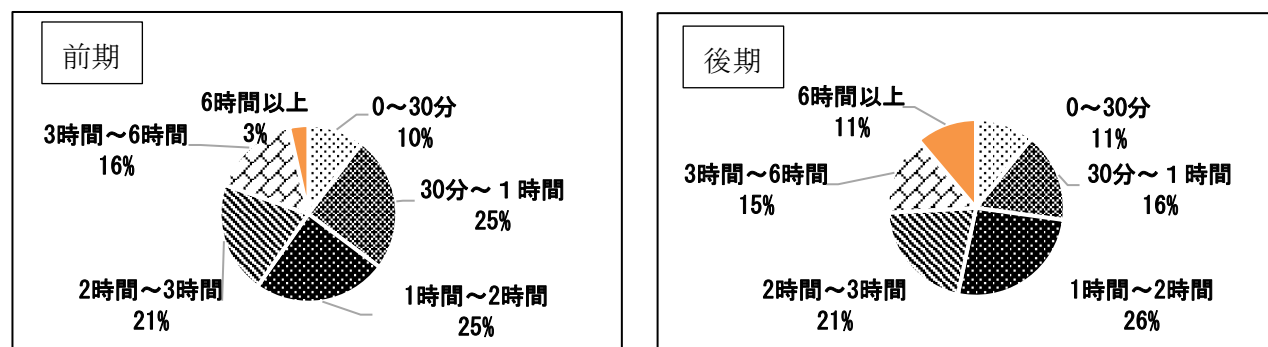
### (2) 1週間の総運動時間は420分以上ですか？ (体育を除く)



### (3) スクリーンタイムを減らす努力をしていますか？



### (4) 平均スクリーンタイム



★ 新体力テスト（20mシャトルラン・50m走）の結果，以下の成果が見られた。

【20mシャトルラン】（差の網掛けが上昇値）

学年	1年		2年		3年		4年		5年		6年	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
5月	20.92	17.59	23.75	20.84	31.47	25.12	37.56	28.06	39.98	34.1	46.15	38.61
1月	26.57	20.54	31.02	24.15	36.43	31.61	43.32	32.28	55.05	43.5	63.92	47.51
差(伸び)	+5.65	+2.95	+7.27	+3.31	+4.96	+6.49	+5.76	+4.22	+15.0	+9.4	+17.7	+8.9

【50m走】（差の網掛けが上昇値）

学年	1年		2年		3年		4年		5年		6年	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
5月	11.28	12.06	11.18	11.41	10.35	10.59	9.89	10.21	9.67	9.47	8.96	8.95
1月	11.22	12.03	10.89	11.22	9.98	10.4	10.40	10.19	9.15	9.29	9.0	9.2
差(伸び)	-0.06	-0.03	-0.29	-0.19	-0.37	-0.19	0.51	-0.02	-0.52	-0.18	0.04	0.25

## 5 研究成果

### (1) 成果

今年度の取組により、「運動は好き」と答えた児童が92.6%という結果となった。前期には86%だった肯定的回答が6%上昇したことは、大きな成果と言える。理由の中には、今年度の大きな取組である【合同体育】や【運動委員会の取組】の影響であると回答した児童もいたことから、今年度の取組の成果であったと考える。また、体育科の授業を充実させる上で、【友達との関わり】を確実に取り入れることで集団思考する場面を設定したり、体づくり運動に重点を置き、自分で運動を考えるように仕組んだりしたことも、成果として挙げられる。

新体力テストの結果は、各学年大きな成果を挙げた。特に、20mシャトルランにおいては、全学年の数値が上昇した。一番大きな伸びのあった第6学年においては、17回の上昇が見られる。これは、340m相当の体力が付いたことを意味しており、この一年間の取組が実を結んだと言える。また、50m走においては、全学年とはいかなかったものの、9学年/12学年での数値上昇が見られている。

### (2) 課題

児童アンケートの結果より、運動時間が1週間で420分以上となる児童が32%から33%となっている。ここに体育の時間が加わるとしても、運動時間が少ない。1週間で420分の運動時間を確保できるよう、来年度も継続した取組に加え、新たな取組が必要となってくる。

スクリーンタイムに関しては、2時間以上となる児童が47%となっている。これは、前期の40%を大きく上回っており、来年度の取組の強化の必要性を感じる。児童アンケートからは、スクリーンタイムを減らす努力をしている様子が窺えるが、その成果を感じることはできない。児童一人一人が自分の家でのルールを設定し、生活リズムを整え、少しずつスクリーンタイムを減らすことができるよう、来年度は、家庭との連携を強化していかなければならない。